冬の水と春の水 純粋な愛の概念とギュイヨン夫人

小泉友美 KOIZUMI Tomomi

目次

冬の水と春の水 1

目次

冬の水と春の水

冬の水と春の水 純粋な愛の概念とギュイヨン夫人

フランスの神秘主義者であり、キエティスム (静寂主義) の代表的な主唱者の一人、ギュイヨン夫人 (1648-1717 年) の代表作である奔流 (1683 年出版) と雅歌の解説 (1688 年出版) よりインスピレーションを受けて、一人称形式でアレンジしてみました。既に、2022 年に現在販売中のファム・ミスティカ　愛の狂炎に記載されたものですが、初版本は体調が悪い時に執筆し、失敗作ですので、絶版処理を希望しておりますので、購入または、お読みにならないで下さい。

ギュイヨン夫人 Jeanne - Marie Bouvier de la Motte- Guyon (1648-1717 年) はフランスの神秘主義者であり、キエティスム (静寂主義) の代表的な主唱者の一人。
フランスのロワル県モンタルジ生まれ。自分の血の繋がったいとこは、高名な神学者であるフランソワ• フェヌロン François Fénelon (1651- 1715 年ペリゴール地方にあるフェヌロン城に生まれました。幼少の時より、ギリシャ語と古典、哲学と修辞学を学びました。1677 年にサルラの司祭に任命され、ユグノー (プロテスタント• カルヴァン主義) に対し改宗を促す活動を続けながら、国王に頼み軍隊を排除する様に、住民を抑圧しない様に頼みました。プラトンに由来する独特の理想国家 (ユートピア思想) を描いたテレマックの冒険の著者です。)
ギュイヨン夫人は一時的にマダム• マントノン Madame de Maintenon (1635-1719 年) の宮廷サロンで、霊的指導者として知られていましたが、純粋な愛の理論と神秘的思想の傾倒の為に、その地位を追われて、1695 年より逮捕され投獄されました。1703 年に釈放された後、ブロワ近郊の息子の元に身を寄せて、その余生を慈善行為や信仰の問題に取り組みました。

17 世紀の純粋な愛の理論は、自分の救いや見返りを一切求めずに、ただ神そのものを愛すると言うスピリチュアリティーです。
この理論は、静寂主義 (キエティスム) へと結びつきました。自分の意志で何かをする事を止め、魂を完全に神に委ねる事で、神との完全な一致を目指しました。
フランソワ• ド• サール François de Sales (1567-1622 年) は、喜びとしての神への愛を説き、ピエール• ド• ベリュール Pierre de Bérulle (1575-1629 年) は敬虔さと聖女マグダラのマリアの姿に理想の愛を求めました。フランソワ• フェヌロンとギュイヨン夫人は、純粋な愛によって神と一体化してしまうと、教会も、罪をも恐れる必要も無くなってしまう為に、非難を受けました。

ギュイヨン夫人の神秘主義用語は、感嘆詞を多く使った表現から成り、完全無私で自己を無くす神への愛が、その神秘主義の土台となっております。

冬の水と春の水

マダムは残り少ない焚き火に両掌をかざして、寒さの為に強張った筋をほぐしている。寡婦の様な黒レースが、純白の額に揺れて、陽炎の様な影が、床から窓の外に伸びている。ぱちぱちと火の粉が宙に舞っては、涙はとめどなく流れて、今おかれている宿命にとまどう。
この牢獄に閉じ込められて、既に 4 カ月。早朝から深夜にかけて囚人に与えられるのは、1 本の蝋燭と、2 本の焚き木のみで、ひび割れた明かり取り用の窓からは、木枯らしが容赦無く吹きつける。
過去において、味わった事の無い様な寒さから来る苦しみよりも、孤独と世間から捨てられた嘲りは、繊細な心から鮮血をほとばしらせる。
叫びたいのに声にならず、繰り返し、繰り返し、鷲鳥の羽ペンが歪な曲線を描いている。
今囚えられている塔は、中世の昔より国王の狩猟用の森として名高い森に建てられており、堅固に年代を重ねていくにつれ強化されて、ところどころに緋色の輝きを放つ、白石灰色で造られている。この塔から抜け出すには 3 つに 1 つ、窓を割って空中に身を投じるか、聖人伝の様に長い髪を編んで、梯子として降りてゆくか、国王の特別な恩赦を得るかである。暗く、長い冬が続く中、魂は寒さに凍えて、冷たい雨や雪の嵐に汚されてしまった。外からの試練は、内なる魂の殻を打ち破って、外へと飛び出してゆく事で、厳しい冬は去ってゆく。外へと顕れていた死は過ぎ去って、冬の雨は駆け去って、何も恐れる事は無い。
不意に訪れた黒鳶の翼が、懐かしい黒衣の記憶を呼び覚ましてゆく。

魂はいつも見捨てられた情況にあります。
ただただ、おもむくままに、魂を神の意志に委ねたい。生きる事も無く、死ぬ事も無く、過去も未来も、天国も地獄も無く、ただひたすら、すべてを捨てたい。

少しずつ心身の温もりを取り戻して来て、既に、茨の冠を投げ捨てた。
舐める様な炎が、暖炉にざわめいている。傷ついた茨ほど、無限の棘を纏いたがる。棘が無ければ、外部からの攻撃に身を守れないと信じて。
その棘は、かえって自分自身にも、内側にも外側にも、余計な傷を与えてしまうのだ。

キリストの茨の冠は、枯れたナツメの枝で編まれて、円形の透明ケースに、金メッキの青銅、宝石で囲まれている。3 つの朽ち果てた釘に、ブルーの白百合の紋章。沈黙の中で、痛々しい冠を額へと下げてゆく。
生温い液体が頬を伝わってゆき、はたして苦痛による、涙か血液なのかわからない。60 または 70 にもなる棘は、過去において生き生きと、緑鮮やかであったろうと、ただ、喜

びが湧き上がって来る。

私達は、世界の果ての茨を集めて、その苦しみすべてを、贖う主の頭上においてみせる。

キューと、どこかで牝鹿が鳴いている。優しい水と暗い水、鮮やかな光と鈍い暗闇は、心をざわめかせる。
ぎらぎらとはね返る陽の反射に、砂漠化してゆく丘を乗り越えられない、2 つの魂の渇きを再び覚えはじめた。

鏡面に映っている私は、なんと老いてしまったのか。
昼間でも薄暗いこの部屋は、駆けずり回るネズミの足音、大群の羽蟻の行進に占領されて、存在は塵よりも薄らぎ、隅へ隅へと追い込まれてゆく。よって、部屋の中央はぽっかりと空いたまま、四辺すべてにぎゅうぎゅうと家具が寄り添っている。

この鏡台も、傾きがちな窓の縁に押し付けられたまま。
大きく斜めに走ったひびに、いびつな長い手脚を折った毒蜘蛛。

あぁ。

溜息は、埃で真っ白になった紅ビロードに鮮やかな、金銀のブローチを撫でゆく。
澱んだ暗い水滴が曲線を描いては、魂の虚栄を暴いて、恩恵• 虚栄は七色のガラス玉、衣服を取り替える様に奪っていってほしい。
溜息、嘆き、涙と言う困惑の水流に魂は顕われる。

安らぎに慣れてしまった魂を、愛する人は受け入れない。
哀れみを誘う様な眼差しで見つめては、渦巻く怒りの感情に呑まれてゆく。

哀れな魂は、激流に悶え、水底に円を描いて落ちてゆく木の葉に似て、泣きわめきながら、姿を消した愛する人を求めてゆく。
慣れない魂の様に立ち止まりはせずに、絶え間無く駆け続けてゆくのみ。ゆっくりと穏やかに、その歩を進めて、宝物が奪われぬ様、恐れおののく。

愛する人からの寵愛が失なわれる事に疲れて、喜び哀しみも複雑に織られた心は、うろこをはらはらと落としてゆく。

もっと愛する神に仕えたい、
もっと忠実でありたい、
荒い波にもまれながら、岩から岩へと砕けてゆく。

この哀れな魂は、自分よりも優れて、恩恵を得ている魂を見ると、ますます深淵なる暗

闇につき落とされる。

なんということ!
貴方を失えばもう二度と巡り会えない。
なんということ!
永遠に愛を失うのですって。

汚された魂は新しく清められて、白くなりたい。ごみ溜の中に転び続けて、取り返しがつかなくなってしまうのは、動けば動くほど、汚物にまみれてしまうから。

凍てついた晴天とは似つかわしく無い、翳りの中の鏡面に映し出された皮膚が、蜘蛛の巣の様に細かく割れている事に恐怖を覚えている。薫り高い精水をいかに振りかけたとしても、以前の様な華やかさを咲かせる事が出来ようか。

水、活きた水を与えたまえ。

魂の内側よりとどろく滝の源流は、いましがた山の頂きにあっても、すぐに地下へと堕ちてゆく。
こうして魂は、落下に委ねる事ですべての重荷から解放される。この絶望の状態で、なにかに寄りかからなくてはならなくて、信心に凝り固まって苦行を激化させてゆく。
孤独と断絶という状況に身を寄せては、解決策を探しても無駄のみ。
水流は、ぐんぐん反対方向へと押し流されていってしまう。
神からの恩恵も受けず、あらゆる神の創造物に助けを求めても、その魂の不実さを増してゆく。

すべての心の平和を奪われた。
もう生きてはいけない。

この世におけるすべての名声、名誉はゴーという激流に呑みこまれてゆき、愛する者を失い、魂を迫害する者もまたその道を失う。

おぉ! 助けて! いま! ここに! 来て! 愛している! 死にたい! 沈んでゆく! おぉ!

魂の病という、過酷な試練と痛みに少しずつ意識が遠のいてゆき、過去は忘却に、将来は神の摂理のまま、ひたすら呼びかけていた。

すべての心の平和を奪われた。もう、生きてはいけない。

ギスギスであった森の樹々は、ふっくりとした芽をまといはじめて、鏡台の蝋燭の節約を憂く事が無くなった。冬の隙間風から解放された窓は、穏やかな夢に悶えて、緑藻の

水面下へと誘う。窓下に広がる森中央に浮かぶ島の白いあずま屋に香しい芳香を放つ白百合のイメージに例えられた若き姿は、茨の茂に咲いたまま、両掌はヒヤシンスで覆われて、暖かな腕の中で、溶ける様な愛を味わう。

世間は少しの間違いも、不正も、歪みも受け入れられず、激しく告発しては追いつめる。
全ては、秩序より成り立っている。
黄金色の朝日に導かれては、遠くから遠くへと、鹿の泣き声がこだまして、朝霧、薄桃色の雲がたゆまない、光の階段が現れてゆく。

大きな河の流れは、ゆったりと、すべての心の重荷を積み上げては、遥かなる海流へと落ち合うであろう。
胸にさざめく水流は、多大な恩恵と天上の恵に溢れている。

魂に、ありとあらゆる才能、恩恵、内面から湧き上がって来る言葉、恍惚を与えてくださる。もしもこの魂が本当に優れているのであれば、過度の期待を持ち過ぎずに、少しずつ進行してゆくだろう。

既に、何百もの厚い束となった書簡集をもて余していた。定期的に、見張りが書簡を取り上げに来る。
投獄され、かつ、心の自由は与えられず、書簡という声無き意志表現を誰もが怖れている。
魂は物理的に
な触れ会いの無いまま、若き婚姻者の様に、お互いの存在を視線を交えて認識している。
春の生ぬるい水が、この頑丈な壁を貫いて、ゆらゆらと天井に立ち登っている。
長い冬の湿り気は、青黴として群集していたが、いつぞや陽気に浮かれて消えてしまった。
春の水の軽さ、生温かさ、平行線と交差、黄色い歓声。
愛する唯一の対象のみ進んでゆけば、すべての心のざわめきや現世の苦しみから離れる事が出来る。炎が中心へと近づく度に、心の休息を得る事が出来る。
魂とて同じ事、もしも罪を抑える事が出来れば、精力的に神の存在を見出す事が出来るでしょう。

揺らぐ炎はいくつかの難題に突きあたる事がある。例えば、丸太や藁の束、これらの障害はすべて、松明の炎で燃やし尽くしてしまえば良い。
感想を求められるのでも無く、意見を交えるのでも無く、ただひたすらに書簡は薪に放り込まれるか、または嘲笑いの対象として、読まれるのでも無く、ぱらぱらとページが捲くられては黴臭い地下室に保存されているかも知れない。
この書簡は、

私のすべて!

想い綴って、苦しみも喜びも、一文字、一文字に浮き上がっている。
炎が数多くの難題に会う度に、魂の被害は大がかりなものとなり、文章の綴りが乱れる度に、絶え間無く、新しい難題が増えてゆく。

あぁ、神様　私を哀れみたまえ!

春の水という若がえりの泉は、額を濡らしては、決断を促している。
大きなうねりは、優雅な筆跡を真紅から埋もれる灰と化す。

春の水は、明るい緑色を呑み込みながら、一面に薄紅色の花々を咲かれ、水紋を開かせながら、海流へと包み込まれてゆく。

紅の炎の波も、書簡を焼き尽くし、燃える心臓を粉々にして、辺りは果てしなく、灰の山がそびえ始めている。
内面に浮き上がるさざ波、うねり返る水流が外へ外へと溢れ出て行き、大きな腕の合流先が、言葉無く、ただ沈黙の元に水のざわめきを感じている。

冬の水、春の水。
春の水、冬の水。
アヴェ• マリア、ヴィーヴ• ジョゼフ!

完

2026 年 11 月 3 日　フランス• アンジェ Angers 平和　祈

冬の水と春の水 純粋な愛の概念とギュイヨン夫人

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社